新植民地主義の弁護士

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（四）

外文出版社

北京

新植民地主義の弁護士

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（四）

『人民日報』編集部
『紅　旗』誌編集部

（1963年10月22日）

外文出版社
北京

新植民地主義の弁護士

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（四）

『人民日報』編集部
『紅　旗』誌編集部

（一九六三年十月二十二日）

第二次世界大戦後、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ大陸に偉大な革命のあらしがおこった。アジア、アフリカの五十余ヵ国が独立を宣言し、中国、ベトナム、朝鮮、キューバの四ヵ国が社会主義への道を歩みだし、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの様相は、きわめて大きな変化がおこった。

第一次世界大戦後、帝国主義およびその手先の弾圧を受けて、植民地、半植民地の革命が重大な挫折をこうむったということができるならば、第二次世界大戦後の状況は、すでに根本的に違ってきたといえよう。帝国主義者は、もはや民族解放運動の荒野を焼きつくすような大火をけしとめることができなくなった。帝国主義のふるい植民地体制は急速に瓦解し、帝国主義の後方は

帝国主義反対闘争の、戦火天をこがす前線となった。植民地と従属国にたいする帝国主義の支配は、一部の国ではすでにくつがえされ、その他一部の国でも重大な打撃をこうむって、まさにくずれ落ちようとしている。このことはまた、帝国主義の自国での支配をよわめ、ゆるがさずにはおかないのである。

アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の革命の勝利は、社会主義陣営の形成と互いに呼応しあって、われわれの時代の天にもとどろく凱歌となっている。

アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の革命のあらしは、現代世界のあらゆる政治勢力に自己の態度をそれぞれ表明するよう要求している。この偉大な革命的あらしに直面して、帝国主義者と植民地主義者はおそれおののき、全世界の革命的な人民は歓呼の声をあげている。帝国主義者と植民地主義者は、「とてもまずい、とてもまずい」とわめき、全世界の革命的な人民は、「すばらしい、すばらしい」と叫んでいる。帝国主義者と植民地主義者は、「これはむほんだ、こんなことは許されない」と称しているが、全世界の革命的な人民は、「これは革命である。これは人民の権利である。これはいかなる人も阻止することのできない歴史的潮流である」といっている。

現代世界政治のこのもっとも尖鋭な問題にたいして、どんな態度をとるかということは、マルクス・レーニン主義者と現代修正主義者とを区別する一つの重要な分水嶺である。マルクス・レーニン主義者は、だんことして被抑圧民族の側にたち、民族解放運動を積極的に支持している。しかるに、現代修正主義者は、実際上、帝国主義や植民地主義の側にたち、あらゆる手をつくして民族解放運動を否定し、それに反対している。

ソ連共産党指導部は口先だけでは、まだ民族解放運動支持の旗じるしを完全に捨てさりきれないで、時と場合によっては、自分自身の利害関係から出発して、なんらかの行動をとり、うわべだけをとりつくろっている。しかし、主要な面から見れば、また、かれらが長年らい吹聴してきた一連の論点、実行してきた一連の政策から見れば、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの被抑圧民族の解放闘争にたいして、かれらは消極的、軽蔑的、否定的な態度をとり、新植民地主義の弁護士になりさがっている。

ソ連共産党中央委員会の七月十四日づけの公開書簡とソ連共産党同志の多くの文章や演説は、民族解放運動の問題で、自分自身のあやまった観点を弁護し、中国共産党を攻撃するのに、ひじような努力をかたむけている。だが、これらはすべて、ソ連共産党指導部のこの問題における反マルクス・レーニン主義的立場、革命に反対する立場を、よりいっそう証明したにすぎない。

そこで、いま、われわれはソ連共産党指導部が民族解放運動の問題でとっている「理論」と実

践をみることにしよう。

帝国主義反対と植民地主義反対の闘争任務の解消

アジア、アフリカ、ラテンアメリカの民族解放運動は歴史的意義をもつ偉大な勝利をかちとった。この点では、いかなる人も否認することができない。しかし、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民のまえに横たわっている帝国主義、植民地主義およびその代理人に反対する闘争任務は、すでに終わりを告げた、といえるだろうか。

われわれは、このようにいうことはできないと考えている。この闘争任務は、まだまだ終わりを告げていない。

ところが、これに反して、ソ連共産党指導部は、今日の世界で、植民地主義はすでに消えうせたか、あるいは消えうせつつあるかのような一種の論調をつねにふりまいている。かれらは、「地球上で、いまなお植民地主義の支配をうけて呻吟している人びとは、まだ五〇〇〇万人いる」、植民地主義制度は、ただアフリカのポルトガル領アンゴラ、モザンビークでわずかに残がいをとどめているにすぎず、植民地主義の絶滅はすでに「完成の段階」にはいったと強調している。

ところで、事実はいったいどうであろうか。

まず最初に、アジア、アフリカの状況から見ていくことにしよう。これらの地域の一連の国は独立を宣言した。だが、そのうち多くの国は、帝国主義と植民地主義の支配と隷属から完全にぬけだしてはいない。これらの国ぐには、相変わらず帝国主義の略奪と侵略の対象となっており、新旧植民地主義がしのぎをけずる場所となっている。一部の国では、旧植民地主義者がまたたくまに姿をかえて、新植民地主義者となり、かれらの育成した代理人を通じて、自己の植民地支配をひきつづき維持している。その他一部の国では、表門から狼が出ていったかと思うと、裏口から虎がまたはいってきた。新しい、もっと大きな、もっと危険なアメリカ植民地主義者が、旧植民地主義者にとって代わったのである。アメリカ帝国主義を代表とする新植民地主義の魔手は、アジア、アフリカ諸国人民を激しく脅かしている。

ここで、さらにラテンアメリカ人民の声を聞くことにしよう。

第二ハバナ宣言は、「今日のラテンアメリカは、スペイン植民地帝国よりも、いっそう野ばんな、いっそう強大な、そしてはるかに残酷な帝国主義の桎梏（しっこく）のもとにおかれている」とのべてい

る。

この宣言はまた、つぎのようにのべている。第二次世界大戦が終わってから、「アメリカの投資は一〇〇億ドルをこえている。ラテンアメリカは低廉な原料供給地であるとともに、高価な製品の購買者でもある」、「金はラテンアメリカからアメリカへ、ひっきりなしに流れこんでいる。一分間に約四〇〇〇ドル、一日に五〇〇万ドル、一年に二〇億ドル、五年だと、一〇〇億ドルになる。われわれから一〇〇〇ドルを奪いさるごとに、かれらはわれわれに死体一つを残していく。死体一つが一〇〇〇ドル、これがいわゆる帝国主義の価格なのだ」、と。

第二次世界大戦後、帝国主義はけっして植民地主義を放棄しておらず、新しい方式をとって、新植民地主義をおしすすめている。このことは、事実がひじょうにはっきり示している。このような新植民地主義の重要な特徴の一つは、帝国主義がその直接的な植民地支配という旧方式を変えることを余儀なくされ、植民地支配と植民地搾取を、かれらがえらび出し、育成した代理人を通じておこなうという新方式をとっていることである。アメリカをかしらとする帝国主義は、軍事ブロックの組織、軍事基地の設置、あるいは「連邦」や「共同体」の樹立を利用して、カイライ政権を育成し、植民地国やすでに独立を宣言した国を、自己の支配と隷属のもとに置いている。帝国主義はまた、経済的「援助」などといった方式を利用して、ひきつづきこれらの国ぐにを自己の商品の販売市場、原料供給地、資本輸出の場所とし、これらの国ぐにの富を略奪し、これらの国ぐにの人民の血と汗をしぼりとっている。かれらはまた、国連を重要な道具の一つとして、これらの国ぐにの内政に干渉し、これらの国ぐにに対して、軍事的、経済的、文化的侵略をおこなっている。これらの国ぐにに対する支配が「平和」的手段で維持できなくなると、帝国主義はこれらの国ぐにでクーデターをひきおこし、転覆活動をおこない、ひいてはこれらの国ぐにに対して直接的な武力干渉と武力侵略に出るのである。

新植民地主義をおしすすめる面で、アメリカはもっとも積極的であり、もっとも狡猾である。アメリカ帝国主義は、新植民地主義という武器を用いて、その他の帝国主義の植民地と勢力範囲をかすめとり、全世界に自己の覇権をうちたてようとつとめている。

このような新植民地主義は、いっそう陰険で、いっそう悪らつな植民地主義である。

ソ連共産党指導部におたずねするが、こうした状況を前にして、どうして植民地主義の絶滅がすでに「完成の段階」にはいったということができるのか。

ソ連共産党指導部は、そのデタラメな言いぐさを弁護するため、こともあろうに一九六〇年の声明のなかから自分にとってプラスになる口実を捜し出そうと考えている。かれらは、一九六〇年の声明が植民地体制の急速な崩壊を指摘しているではないか、という。しかし、声明が指摘

している、ふるい植民地制度は急速に崩壊しつつあるという論点は、ソ連共産党指導部がふりまいている植民地主義消失の論点に、なんら助けとなるものではない。それとは逆に、声明ははっきりとつぎのことを暴露している。すなわち、「今日の植民地主義の主柱、それはアメリカである」、「アメリカをかしらとする帝国主義者は、旧植民地人民にたいする植民地的搾取を新しい方法と新しい形態で保持しようと懸命である」、かれらは「アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国における経済的支配と政治的影響の命脈を、自己の手中に保持しようと企てている」。ここで、声明が暴露していることこそ、まさにソ連共産党指導部がなんとかしてかくしだてようとつとめているものにほかならない。

ソ連共産党指導部はさらに、一つの「理論」をつくりだし、民族解放運動がいわゆる経済任務を中心とする「新しい段階」にはいったと称している。かれらは、「以前、闘争は主として政治的分野で展開されていた」、いまでは、経済問題が「中心的任務」となり、「いちだんと革命を発展させる基本的な環となった」と考えている。

民族解放運動は、たしかに新しい段階につきすすんだ。だが、この新しい段階は、けっしてソ連共産党指導部がいっているような「新しい段階」ではない。この新しい段階では、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民がこれまでになく目ざめ、革命運動が空前の高まりをみせ、帝国主

義とその手先の自国における勢力を徹底的に一掃し、政治上、経済上の徹底した独立をかちとることを切実に求めている。これらの諸国が直面している第一の、またもっともさし迫った任務は、いぜんとして帝国主義、新旧植民地主義とその手先に反対する闘争をいちだんと展開することである。この闘争は、相変わらず政治、経済、軍事、文化、思想およびその他の分野ではげしくおこなわれている。これら各分野における闘争は、いぜんとして政治闘争に集中的に表現されており、帝国主義が直接的、あるいは間接的な武力弾圧をおこなっている状況のもとでは、往々にして武力闘争へ発展することがさけられないのである。新しい独立国が独立した民族経済を発展させることは、ひじょうに重要である。しかし、この任務は、けっして帝国主義、新旧植民地主義およびその手先との闘争から切り離すことができないのである。

ソ連共産党指導部のこうしたいわゆる「新しい段階」論は、かれらがふりまいている、いわゆる「植民地主義の消失」論と同様に、アメリカを代表とする新植民地主義のアジア、アフリカ、ラテンアメリカにたいする侵略と略奪を美化し、帝国主義と被抑圧民族とのするどい矛盾をおおいかくして、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の革命闘争をマヒさせようとするものである。このことは、ひじょうにはっきりしている。

ソ連共産党指導部の「理論」によれば、植民地主義はすでに消失に近づいており、いま、民族

解放運動の中心任務は、ただ経済を発展させる問題だけであるということになるが、それなら、理の当然として帝国主義、新旧植民地主義およびその手先に反対する闘争をすすめる必要もないのである。こうなれば、民族解放の任務も、根こそぎ解消することになるのではなかろうか。そこで、人びとは、ここからつぎのことを知ることができよう。すなわち、ソ連共産党指導部がいっている経済任務を中心とする「新しい段階」とは、もともと帝国主義、新旧植民地主義およびその手先への反対が不必要な段階、民族解放運動の不必要な段階ということである。

被抑圧民族の革命を解消する処方

ソ連共産党指導部は、かれらのあやまった「理論」にもとづいて、被抑圧民族のために、万病にきくという処方を、きわめて念入りにつくりあげた。では、ここで、この処方なるものを拝見してみよう。

第一の処方は、平和共存と平和的競争と称するもの。

ソ連共産党指導部は、つねづね、戦後アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民が民族解放運動

において一連の偉大な勝利をかちとったことを、すべてかれらのいわゆる「平和共存」と「平和的競争」のてがらに帰している。ソ連共産党中央委員会の公開書簡はつぎのようにのべている。

「平和共存という情勢のもとで、最近数年らい、プロレタリアートの階級闘争と、民族の自由をかちとる諸国人民の闘争は、ことごとく大きな新しい勝利をおさめ、世界革命の行程は、順調な発展をとげている」

ソ連共産党指導部はまた、つねにこのようにもいっている。民族解放運動は、「社会制度の異なる国ぐにが平和的に共存し、二つの対立した社会体制が経済的競争をおこなうという情勢のもとで展開されている」、平和共存と平和的競争は、「諸国人民が外国独占体の経済的支配からまぬがれるという解放過程の発展を促進し」、「資本主義的関係全体」に「壊滅的な打撃をあたえる」ことができると称している。

社会主義国は、社会制度の異なる国ぐにの平和共存に関するレーニン主義の政策を実施しなければならない。しかし、平和共存と平和的競争が諸国人民大衆の革命的闘争にとって代わることは、あくまでできないのである。あらゆる植民地、従属国が民族革命の勝利をかちとるには、なによりもまず自国の人民大衆みずからの革命的闘争に依拠せねばならず、他のどのような国もそれにとって代わることはできないのである。

ところが、ソ連共産党指導部によると、民族解放革命の勝利は、主として諸国の人民大衆自身がおこなう革命的闘争に依拠することによって得られるのでなく、また人民大衆が自分で自分自身を解放することによって得られるものでもない、それとは逆に、平和共存と平和的競争により、帝国主義が自然に崩壊するのを待つことによって得られるのである。これは事実上、帝国主義の略奪と隷属を永久にたえしのび、たち上がって反抗したり、革命をおこしたりしないよう被抑圧民族に要求するものである。

第二の処方は、後進国援助と称するもの。

ソ連共産党指導部は、新たに独立した国にたいしてかれらがあたえた経済的援助の役割をベタボメしている。フルシチョフ同志はつぎのようにいっている。こうした援助はこれらの国ぐにに「新たな隷属からまぬがれさせ、かれらの進歩をおしすすめ、その内部的過程の正常な進行と加速度化をうながすであろう。これらの過程は、これらの国ぐにを、社会主義的社会へ発展するにいたるひろびろとした大道に導きいれることができるであろう」、と。

社会主義国が国際主義の原則にもとづいて、新たに独立した国ぐにに経済的援助をあたえることは必要なことであり、大きな意義をもつものである。しかし、これらの国ぐにの民族的独立と社会的変革が、主として自国人民の革命的闘争に依拠するのでなく、ただ社会主義国の経済的援

助にのみ依拠するのだなどとは、どうしてもいえないのである。

そのうえ正直にいって、ソ連共産党指導部がここ数年来、新たに独立した国ぐににたいしておこなった援助の政策と目的は、疑わしいものである。ソ連共産党指導部は、新たに独立した国ぐにを援助するという問題で、しばしば大国排外主義と民族的利己主義の態度をとり、これらの国ぐにの経済的、政治的利益をそこない、その結果、社会主義国の名誉を台なしにしている。ソ連共産党指導部のインドにたいする援助にいたっては、なおさら下心のあるものである。ソ連が新たに独立した国ぐににたいしておこなった援助のうち、インドが第一位をしめている。こうした援助は、あきらかに、ネール政府の反共、反人民、反社会主義国の政策を激励するためのものである。アメリカ帝国主義者でさえ、ソ連のこうした援助は「われわれの利益に合致したものである」といっている。

ソ連共産党指導部はまた、アメリカ帝国主義といっしょに、「後進国を援助する」ことを公然と主張している。フルシチョフは、一九五九年九月アメリカでおこなったある演説のなかでつぎのようにかたっている。「われわれとあなたがたの経済的な成果は、全世界の歓迎を受けるであろう。われわれ二大強国が経済的発展の面で数世紀もたちおくれている人民を援助し、かれらが急速にたちあがれるようにすることを全世界が期待している」、と。

見ていただきたい。今日の植民地主義の主柱であるものが、こともあろうに「急速にたちあがれる」よう被抑圧民族を援助できるというのだ。しかも、ソ連共産党指導部は、ついに甘んじて新植民地主義者の隊列に加わり、なおかつそれを光栄だと思うにいたったのである。これは、まことに人びとを仰天させるものである。

第三の処方は、軍縮と称するもの。

フルシチョフはいう。「軍縮というのは、戦争をおこなう力を削減すること、軍国主義をとりのぞくこと、すべての国の内政への武力干渉を排除すること、さまざまなかたちの植民地主義を徹底的、最終的に消滅すること、これらのことを意味している」、と。

フルシチョフはまた、つぎのようにいっている。「軍縮は、年若い民族国家にたいする援助を、大幅に拡大するのに必要な条件をつくりだすであろう。世界各国が支出する軍事費の総額は、一二〇〇億ドルに達している。かりにその中から八パーセントないし一〇パーセントを捻出して、この目的のために使えば、二十年以内に世界中の貧困地域における飢きん、疾病、文盲状態を一掃することができる」

帝国主義の軍備拡張と戦争準備をあばき、それに反対するために、われわれは全面的軍縮をかちとる闘争を展開するよう一貫して主張してきた。しかし、軍縮を通じて植民地主義を消滅する

ことができるとは決していえないのである。

ここで、フルシチョフは、いかにも神父のようなかっこうでお説教をしている。かれはいう。世界中の苦難にあえいでいる人びとよ、あなたたちにも福音がもたらされたのだ！ 待ちたまえ、帝国主義が武器を捨てるのを待ちたまえ、そうすれば自由がやがてあなたたちの身の上に訪れるだろう。帝国主義が恵みをほどこすのを待ちたまえ、そうすれば世界中の貧困地域がやがてミルクと蜜のあふれる楽園に変わるだろう……と。

これは幻想であるばかりでなく、人民をマヒさせるアヘンである。

第四の処方は、国連を通じての植民地主義消滅と称するもの。

フルシチョフはつぎのように考えている。すなわち、もし国連が措置をとって、植民地主義の制度をとりのぞけば、「外国の支配がもたらした侮辱によって、現に苦しみをなめている諸国の人民は、外国の桎梏からまぬがれ、平和的に解放されるというかがやかしい見通しをもつであろう」

フルシチョフは、一九六〇年九月の国連総会における演説の中で、「国連によって植民地主義的管理制度をとりのぞかなければ、だれによってそれをとりのぞくのか」とのべている。

まことに奇怪な疑問を発したものである！ フルシチョフによれば、アジア、アフリカ、ラテ

ンアメリカの革命的人民は植民地主義を消滅してはならないし、また消滅することもできない。もし植民地主義を消滅しようとするなら、それを国連に期待せよというのである。

フルシチョフは例の国連総会でまた、「われわれは、西側諸国人民の良識と遠見に、またかれらの政府と、国連の崇高な今回の会議に列席しておられる代表のみなさんに、つぎのようによびかける。お互いに植民地的管理制度の消滅を旨とする措置に歩調をあわせ、それによって法則に合致したこの歴史的行程をはやめよう」とのべている。これからもわかるように、フルシチョフのいう国連の助力に望みをかけることは、帝国主義の助力に望みをかけることの代名詞にほかならない。いまもなお帝国主義の手にあやつられている国連は、ただ植民地主義的支配を維持し、増強し得るだけであって、どのような植民地主義をも消滅し得ないものであることを事実が証明している。

一言でいえば、ソ連共産党指導部が民族解放運動のためにつくりあげた処方は、とりもなおさず、帝国主義が植民地主義を放棄し、自由と解放を被抑圧民族と被抑圧人民にほどこす可能性があるということを人びとに信じこませることなのである。それゆえ、すべての革命的理論、すべての革命的主張、すべての革命的闘争はことごとく時代おくれのものであり、不必要なものであり、みな解消すべきものであり、また解消しなければならないものなのである。

民族解放戦争に反対

ソ連共産党指導部がこのように百方手を尽くして、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの人民に革命闘争を放棄させようとしているのは、かれらが口先では民族解放運動、民族解放戦争を支持するといってはいるが、実際上は革命のあらしを前にしておそれおののいているからである。

ソ連共産党指導部は、一つの有名な「理論」をもっている。すなわち、「一つの小さな火だねでも世界大戦を引きおこすことができ」、世界大戦がいったんぼっ発すれば、かならず熱核戦争となり、人類の壊滅をもたらす。それゆえ、フルシチョフは「現代において、『局地的戦争』は非常に危険である」、「われわれは根強く努力をはらって、戦火を引きおこす可能性のある小さな火だねを消しとめなければならない」と大声をあげて呼びかけている。ここで、フルシチョフは正義の戦争と不正義の戦争を全然区別せず、共産主義者は正義の戦争を支持しなければならないという立場にそむき、これを放棄している。

第二次世界大戦後の十八年の歴史はつぎのことを証明している。すなわち、帝国主義とその手

先が銃剣にたよって暴虐な支配をおこない、被抑圧民族の革命を武力で弾圧するという条件のもとでは、民族解放戦争は避けられないものである。帝国主義とその手先に反対する不断につづけられている大小さまざまな革命戦争は、帝国主義の戦争勢力に打撃をあたえ、世界平和擁護勢力を強化し、帝国主義が世界戦争を挑発しようとする計画を力強く阻止している。フルシチョフは平和のためには革命の小さな火だねを「消しとめ」なければならないと大いにわめきたてているが、あばいていえば、それは平和をまもるという名を借りて、実際には革命に反対しているのである。

まさにこのようなあやまった観点と政策に立って、ソ連共産党指導部は、すべての被抑圧民族に、解放をめざす革命闘争を放棄するよう要求し、また帝国主義および植民地主義と「平和的に共存する」よう要求しているのである。しかも、帝国主義と同じ側に立って、さまざまな手段をろうし、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの革命の火だねを消しとめようとしているのである。

アルジェリア人民の民族解放戦争を例にとってみよう。ソ連共産党指導部は、長い間これを支持しなかったばかりか、逆にフランス帝国主義の側に立っていた。フルシチョフは、かつてアルジェリアの民族独立問題をフランスの「内政問題」とみなした。一九五五年十月三日、フルシチョフはアルジェリア問題に言及した際、「わたくしがまっさきに考慮したことは、ソ連が他国の

内政に干渉しないということである」といった。かれはまた一九五八年三月十九日、フランスの『フィガロ』紙記者と会見したとき、「われわれはフランスが弱まることを望んでいない。フランスがその尊厳を強固にすることを希望している」とのべた。

ソ連共産党指導部は、フランス帝国主義のきげんをとるため、長い間アルジェリア共和国臨時政府をあえて承認しなかった。そしてアルジェリア人民のフランスに反抗する戦争の勝利が確実なものとなり、フランスがアルジェリアの独立に同意することを余儀なくされるにいたってはじめて、あわてふためいて承認を宣言したのである。このような醜態は、社会主義国の面目をまるつぶしにした。ところが、ソ連共産党指導部はこの恥ずべきことをかえって自慢のたねにし、アルジェリア人民が流血の代価を払ってかちとった成果を、かれらのいわゆる「平和共存」の論功記録簿に書きのこすべきだといいはっている。

つぎに、ソ連共産党指導部がコンゴ問題で演じた役割を見てみよう。かれらは、コンゴ人民がおこなった植民地主義反対の武力闘争を積極的に支持しなかったばかりか、それとは逆に、いそいでアメリカ帝国主義と「協力」し、コンゴの火だねを消しとめてしまったのである。

一九六〇年七月十三日、ソ連はアメリカとともに、国連軍のコンゴ派遣にかんする国連安保理事会の決議に賛成票を投じ、アメリカ帝国主義が国連の旗じるしを利用して、コンゴにたいし武

力干渉をおこなうのを助けた。しかもソ連はその国連軍に運輸手段を提供したのである。七月十五日、フルシチョフは、カサブブとルムンバあての電報のなかで、こともあろうに「国連安保理事会は有益なことをした」といった。つづいて、ソ連の新聞、出版物は、「コンゴ共和国政府が国家の独立と主権をまもろうとしたとき、国連はこれに援助をあたえた」と、たえずほめたたえ、国連が「だんこたる措置をとる」ことを期待したのである。そして八月二十一日と九月十日、ソ連政府はなおも二回にわたって声明を発表して、コンゴ人民を弾圧した国連を大いにほめたたえた。

一九六一年、ソ連共産党指導部はまた、キゼンガにすすめて、国連軍の「保護」のもとに召集されたコンゴ議会とカイライ政権に参加させた。当時、ソ連共産党指導部はこともあろうに、コンゴ議会の召集は「年若い共和国の生活のなかでの大きなできごとである」、「民族勢力の勝利」であるなどという欺まん的言辞をろうした。

事実はひじょうにはっきりしている。ソ連共産党指導部のこれらのあやまった政策は、アメリカ帝国主義のコンゴ侵略を大いに助けたのである。ルムンバが殺害され、キゼンガが拘禁され、多くの愛国者が迫害にあい、コンゴの民族独立闘争が挫折した。これらの事実にたいして、いったいソ連共産党指導部は自己の責任を少しも感じないのだろうか。

現代世界の矛盾が集中している地域

民族解放運動、民族解放戦争に反対するソ連共産党指導部の言行が、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの革命的人民から反対をうけたのは、理の当然である。だが、ソ連共産党指導部は、このことから必要な教訓をくみとり、かれらのあやまった路線と政策を変えようとはしないで、顔をつぶされたと考えて怒りだし、中国共産党その他のマルクス・レーニン主義政党に一連の中傷と攻撃をくわえている。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、中国共産党が「新しい理論」を提起したといって攻撃している。「この理論によると、われわれの時代の基本的矛盾は、社会主義と帝国主義の間の矛盾ではなく、民族解放運動と帝国主義の間の矛盾であるという、とんでもないことになる。中国の同志からみれば、帝国主義反対闘争の決定的な力は、世界社会主義体制でもなく、国際労働者階級の闘争でもない。それは依然として民族解放運動である」と公開書簡はのべている。

まず第一に、これはデッチあげである。われわれは、六月十四日づけの書簡でつぎのように指

摘した。すなわち、現代世界の基本的矛盾は、社会主義陣営と帝国主義陣営の矛盾、資本主義国内部のプロレタリアートとブルジョアジーの矛盾、被抑圧民族と帝国主義の矛盾、帝国主義国と帝国主義国、独占資本グループと独占資本グループとのあいだの矛盾である。

われわれはまた、つぎのようにも指摘した。社会主義陣営と帝国主義陣営の矛盾は、社会主義と資本主義という二つの根本的に異なる社会制度の矛盾であり、この種の矛盾は疑いもなくひじょうに鋭いものである。しかし、マルクス・レーニン主義者は、世界的規模の矛盾を単純に社会主義陣営と帝国主義陣営の矛盾だけであるとみなすわけにはいかない。

われわれの観点はひじょうにはっきりしている。

われわれは六月十四日づけの書簡のなかで、アジア、アフリカ、ラテンアメリカにおける革命の情勢および民族解放運動の意義と役割について論証した。われわれは、つぎのようにのべた。

第一に、「アジア、アフリカ、ラテンアメリカの広大な地域は、現代世界のさまざまな矛盾の集中している地域であり、帝国主義支配のもっとも弱い地域であり、いま帝国主義に直接的打撃をあたえている世界革命のあらしがふきすさんでいるおもな地域である」

第二に、「これらの地域の民族民主革命運動は、国際社会主義革命運動とともに、現代における二つの大きな歴史的潮流である」

第三に、「これらの地域の民族民主革命は、現代のプロレタリア世界革命の重要な構成部分である」

第四に、「アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の帝国主義に反対する革命闘争は、帝国主義と新旧植民地主義の支配の基礎に痛烈な打撃をあたえ、これを弱め、現代における世界の平和を守る強大な勢力となっている」

第五に、「したがって、一定の意義からいって、国際プロレタリアートの革命事業全体は、とどのつまり、世界人口の圧倒的多数を占めるこれら地域の人民の革命闘争いかんにかかっている」

第六に、「したがって、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の帝国主義に反対する革命闘争は、決して地域的な問題ではなく、国際プロレタリアートの世界革命の事業全体にかかわる、全局的な問題である」

これらは、ことごとくマルクス・レーニン主義的な論点であり、また現代の実際情勢から出発して、科学的分析をおこなった結論である。

現在、アジア、アフリカ、ラテンアメリカに、ひじょうに有利な革命情勢が存在しているのをだれも否定することはできない。アジア、アフリカ、ラテンアメリカの民族解放革命は、帝国主

義に直接的打撃をあたえる当面のもっとも重要な勢力である。アジア、アフリカ、ラテンアメリカは世界の矛盾が集中している地域である。

世界の矛盾の焦点、世界の政治的闘争の焦点は、固定した、変わらないものではなく、国際的闘争と革命の情勢の変化につれて移り変わっていくものである。資本主義の発祥地であり、帝国主義の心臓部である西ヨーロッパと北アメリカで、プロレタリアートとブルジョアジーの矛盾が深まり、闘争が発展することによって、偉大な一大決戦の日がいつかはかならずくることをわれわれは信じている。その時こそ、西ヨーロッパと北アメリカとが世界における政治的闘争の焦点となり、また世界における矛盾の焦点となることは疑いもないことである。

レーニンは一九一三年に、「アジアにもっとも偉大な世界的あらしの新しい源泉がひらかれた」、「われわれはいままさに、これらのあらしの時代、そしてそれがヨーロッパに『反映』する時代に生きている」（『レーニン全集』第十八巻）と語ったことがある。

スターリンは、一九二五年に、「植民地諸国は、帝国主義の主要な後方である。この後方の革命化は、帝国主義をほりくずさずにはおかない。それは帝国主義が後方をうばわれるという意味だけでなく、東洋の革命化は、西洋における革命的危機の激化に決定的な刺戟をあたえるにちがいないという意味でも、ほりくずさずにはおかないのである」（『スターリン全集』第七巻）

とのべた。

レーニンとスターリンの言葉があやまっているとでもいうのだろうか。これらの道理はもともと、ずっと以前からマルクス・レーニン主義の常識になっている。あきらかに、やっきとなって民族解放運動をけなそうとしているソ連共産党指導部は、マルクス・レーニン主義の最低限度の常識と、ひじょうにはっきりした目前の事実をまったく無視しているのである。

革命の指導権にかんするレーニン主義的思想の歪曲

ソ連共産党中央委員会の七月十四日づけの公開書簡はまた、民族解放運動におけるプロレタリアートの指導権の問題について、中国共産党の論点を攻撃した。公開書簡はつぎのようにのべている。「中国の同志はこともあろうに、レーニンの思想を『是正』しようとし、全世界の反帝闘争を指導するのは労働者階級ではなく、小ブルジョアジーか民族ブルジョアジー、はなはだしきにいたっては『一部の愛国的な王公貴族』であることを証明しようとしている」

これは、中国共産党の観点に対するきわめて露骨な歪曲である。

中国共産党中央委員会の六月十四日づけの書簡は、民族解放運動のなかで、かならずプロレタリアートの指導権を堅持しなければならないことを言及した時、歴史がアジア、アフリカ、ラテンアメリカ地域のプロレタリア政党にあたえた光栄ある使命は次のとおりであるとのべた。「帝国主義反対、新旧植民地主義反対、民族独立の実現、人民民主主義の実現という旗じるしを高くかかげて、民族民主革命運動の最前列に立ち、社会主義の前途をたたかいとること」であり、「プロレタリアートとその政党は、労農同盟を基礎として、団結できるすべての階層を団結させ、帝国主義とその手先に反対する広はんな統一戦線を組織すべきである。この統一戦線を強め、発展させるには、プロレタリア政党が思想上、政治上、組織上、独立性をたもち、革命の指導権を堅持することが必要である」、と。

中国共産党中央委員会の六月十四日づけの書簡は、民族解放運動のなかで、かならず広はんな反帝統一戦線をうちたてなければならないと言及したさい、つぎのようにのべた。「アジア、アフリカ、ラテンアメリカの被抑圧民族と被抑圧人民は、帝国主義とその手先に反対するというさしせまった任務に直面している」、「これらの地域で帝国主義の隷属をうけることをのぞまない人びとはきわめて広はんにわたっており、労働者、農民、知識人、小ブルジョアジーばかりでなく、愛国的な民族ブルジョアジー、ひいては、一部の愛国的な王公貴族さえも含まれている」、

と。

われわれのこれらの観点はすべて、ひじょうにはっきりしている。民族解放運動のなかで、かならずプロレタリアートの指導権を堅持しなければならないと同時に、かならず広はんな反帝統一戦線をうちたてなければならない。いったいこれらの観点のどこに、誤りがあるというのか。ソ連共産党指導部は、どういうわけでわれわれのこの正しい観点を歪曲し、攻撃するのか。

プロレタリアートの革命的指導権に関するレーニンの思想をうらぎり、捨てさったのは、われわれではなく、まさにソ連共産党指導部なのである。

ソ連共産党指導部のあやまった路線によれば、帝国主義反対と植民地主義反対の闘争任務をまったく解消し、民族解放戦争をおこなうことをまったく反対している。これでは、被抑圧国家のプロレタリアートと共産党に、帝国主義に反対し、民族独立をかちとるという愛国的旗じるしを引きおろせ、それをおとなしく他人にゆずり渡せと要求するに等しい。これで、なお反帝統一戦線やプロレタリアートの指導権をうんぬんすることができるだろうか。

ソ連共産党指導部はまた常に、どのような人物の指導のもとでも、たとえネールのような反動的民族主義者の指導のもとでも、社会主義を建設することができると宣伝している。これではなおさらのこと、プロレタリアートの指導権の思想と天地雲泥の差があるというべきである。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、社会主義陣営、資本主義国の労働運動と民族解放運動との間に存在する相互支持の関係についてつぎのようにいっている。つまり、民族解放運動は社会主義国、植民地国本国の労働運動によって「指導」されなければならない。かれらは、この見解はプロレタリアートの指導権に関するレーニンの思想に「基づく」ものであるといいはっている。これは、あきらかにレーニンの思想にたいするきわめて大きな歪曲であり、改ざんである。このことは、ソ連共産党指導部が、革命を解消するというかれらの路線を、被抑圧民族の革命運動におしつけようとしていることを反映しているものである。

民族主義と変質の道

ソ連共産党指導部は、七月十四日づけの公開書簡のなかで、中国の同志は「民族解放運動を、国際労働者階級とその産物である世界社会主義体制から孤立させている」という罪名を中国共産党になすりつけようとたくらんでいる。かれらはさらに、われわれが民族解放運動を、社会主義体制と西側資本主義国の労働運動から「隔離」し、それに「対立」させていると攻撃している。

フランス共産党指導者のような共産主義者もまた、ソ連共産党指導部の口調をまねて、そのしり馬にのり、大声でわめきたてている。

ところが、事実はどうであろうか。民族解放運動を社会主義陣営と西側資本主義国の労働運動に対立させたのは、ほかでもなく、まさに、民族解放運動を支持せず、それに反対しているソ連共産党指導部とその追従者である。

中国共産党は一貫して、各国人民の革命闘争は、互いに支持しあうものであると考えてきた。われわれは一貫して、民族解放運動を、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の立場から、プロレタリア世界革命の全局的観点から見ている。われわれは、民族解放革命の着々勝利しつつある発展が、社会主義陣営、資本主義国の労働運動、世界平和擁護の事業にたいして、きわめて偉大な役割を果たしていると考えている。

ところが、ソ連共産党指導部とその追従者は、このような役割を認めようとしない。かれらは、民族解放運動にたいする社会主義陣営の支援の役割を口にするだけで、社会主義陣営にたいする民族解放運動の支援の役割をみとめようとはしない。かれらは、西側資本主義国の労働運動が帝国主義に打撃をあたえているという役割を口にするだけで、民族解放運動が帝国主義に打撃をあたえているという役割を過小評価するか、あるいはそれをみとめようとしない。このような

立場はマルクス・レーニン主義にそむくものであり、事実をかえりみないものであり、あやまっているものである。

社会主義国と被抑圧民族の革命との関係をどのようにとりあつかうか、資本主義国の労働運動と被抑圧民族の革命との関係をどのようにとりあつかうか、これはマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義が必要か、必要でないかという重大な原則的問題である。

マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義によれば、すでに勝利したすべての社会主義国は、かならず被抑圧民族の解放をめざすたたかいを積極的に支持し、援助しなければならない。革命に勝利した社会主義国は、かならず全世界の被抑圧民族と被抑圧人民の革命を支持し、発展させるための根拠地とならなければならない、また、かならず全世界の被抑圧民族および被抑圧人民と、もっとも親密な同盟をむすび、プロレタリア世界革命を最後までおしすすめなければならない。

ところが、ソ連共産党指導部は、一国または一部の国における社会主義の勝利を、実際上、プロレタリア世界革命の終結であると見なしている。かれらは、民族解放革命がかれらのいわゆる平和共存の総路線に服従し、かれら一国の民族利益に服従するよう要求している。

一九二五年、スターリンがトロツキストとジノビエフ一味に代表されている清算主義者とたた

かった時、清算主義がもっている危険な特徴の一つとして、つぎのように指摘した。「国際プロレタリア革命にたいする不信、その勝利にたいする不信、植民地、従属国の民族解放運動にたいする懐疑的な態度……一国における社会主義の勝利は、自己目的ではなくて、他の国の革命を発展させ、支持する手段であるという、国際主義のあの基礎的な要求にたいする無理解である」（『スターリン全集』第七巻）

スターリンはこういっている。「これは、民族主義と変質の道であり、プロレタリアートの国際主義的政策を完全に清算する道である。なぜなら、この病気にとりつかれた人たちは、わが国を世界革命運動とよばれる全体の一部分と見ないで、この運動の始めであり終りであると見、わが国の利益のために、他の国の利益が犠牲にされなければならないと考えているからである」（『スターリン全集』第七巻）

スターリンは清算主義者の考え方をつぎのように描き出している。「中国の解放運動を支持すべきだろうか。だが、それはなんのためか。それは危険ではないだろうか。それはわれわれを他の国ぐにと反目させはしないだろうか。われわれは他の『先進的な』列強と共同して中国に『勢力範囲』をさだめ、なにかかにかを自分の利益のために中国からとりあげる方がよくはなかろうか。その方が有利でもあり、安全でもある……」（『スターリン全集』第七巻）

スターリンは「これが、十月革命の対外政策を清算しようとくわだてている、また変質の要素をつちかっている、新しい型の民族主義的『風潮』である」という結論をくだした。（『スターリン全集』第七巻）

現在のソ連共産党指導部は、当時の清算主義者とくらべて、まさるともおとらぬものである。かれらは、みずから利口者をもって任じ、「有利でもあり、安全でもある」ようなことばかりやっている。かれらは帝国主義国と反目することをひじょうにおそれている。それゆえ、かれらは、懸命になって民族解放運動に反対し、いわゆる二つの超大国による世界「勢力範囲」の確定ということに熱を上げている。

スターリンが清算主義者を批判したこの言葉は、現在のソ連共産党指導部の格好な肖像画である。かれらはまさにこのように、清算主義者の後塵をはいして、十月革命の対外政策を清算し、民族主義と変質の道にふみこんでいるのである。

当時、スターリンはつぎのように警告した。「首尾一貫した国際主義にもとづいてしか、十月革命の対外政策にもとづいてしか、最初に勝利した国は世界革命運動の旗手の役割を保持しえないということ、対外政策における最小抵抗と民族主義の道は、最初に勝利した国の孤立と崩壊の道を意味することは、明らかである」（『スターリン全集』第七巻）スターリンのこの警告は、今日のソ連共産党指導部にとって、依然として重大な現実的意義をもっている。

社会排外主義の典型

同様に、プロレタリア国際主義の原則にもとづいて、抑圧民族のプロレタリアートと共産主義者は、かならず積極的に被抑圧民族の民族独立の権利を支持し、かれらの解放闘争を支持しなければならない。抑圧民族のプロレタリア革命は、被抑圧民族の援助を得ることによって、はじめて勝利をかちとるいっそう大きな可能性をもつことができるのである。

レーニンは「ヨーロッパとアメリカの資本に抑圧されている何億という『植民地』奴隷をも、この資本にたいする労働者の闘争のなかで、完全に、もっとも緊密に統合しないならば、先進国の革命運動は、実際にまったくの欺瞞となるであろう」と、急所をついた指摘をしている。（『レーニン全集』第三十一巻）

ところが、マルクス・レーニン主義者と自称する一部の人たちは、まさにこの根本的な原則的問題について、マルクス・レーニン主義を裏切っているのである。フランス共産党の指導者がそ

の典型的な例である。

フランス共産党の指導者は長期にわたって、一方では、アメリカ帝国主義反対の闘争を放棄し、アメリカ帝国主義が政治、経済、軍事の各方面でフランスにたいしておこなっている支配と束縛にたいしてだんことした反対をおこなわず、フランスにおける反米の民族の旗じるしをドゴールらに完全に譲り渡した。また一方では、さまざまな方法や口実をもちいて、フランス帝国主義の植民地的利益をまもり、仏領植民地の民族解放運動、とくに民族解放戦争を支持しないばかりか、これに反対している。かれらは民族排外主義の泥沼におちいったのである。

レーニンは「ヨーロッパ人は、植民地の人民もまた民族であることを、しばしば忘れているが、しかし、このような『健忘症』を大目にみることは、排外主義を大目にみることを意味している」といったことがある。（『レーニン全集』第二十三巻）ところが、トレーズ同志を代表とするフランス共産党指導部は、このような「健忘症」を大目にみているばかりか、仏領植民地の人民を、ことごとく「フランスの血統ではないフランス人」と公然と見なし、かれらがフランスから分離して民族独立をはかる権利をもっていることを認めず、かつ、フランス帝国主義の「民族同化」政策を公然と支持している。

フランス共産党指導者は、十数年らい、フランス帝国主義の植民地政策に追従し、フランス独占

ブルジョアジーのしり馬にのってきた。一九四六年、フランス独占ブルジョアジーの支配者が、新植民地主義の小手先をもてあそんで、フランス連邦を樹立するといい出した時、かれらはすぐそれに追従して、次のように吹聴した。「われわれは一貫して、フランス連邦を自由人民の自由連盟と見ている」、「フランス連邦を樹立すれば、その新しい基礎の上で、フランス人民と従来フランスに隷属していた海外各地の人民との関係を解決することができる」。一九五八年、フランス連邦がつぶれ、フランス政府がフランスの植民地体制をまもるために、「フランス共同体」の組織をもち出したとき、フランス共産党の指導者はまたもやそれに追従して、「われわれは、真の共同体を成立させることが積極的意義をもつものであると信じている」と宣伝した。

そればかりではない。フランス共産党の指導者は、仏領植民地人民の民族独立の要求に反対するために、こともあろうに仏領植民地人民をおどしつけ、「たとえ、その実のともなわない一時的な虚偽の独立をかち得るとしても、フランス連邦を離れようとするいっさいの企図は、結局ただ帝国主義を強化するのに役立つだけである」といった。かれらはまた、公然と「問題は、すでに不可避的となったこの独立を、フランスを通じて実現させるか、それともフランスを通ぜず、あるいはフランスに反対して実現させるかにある。われわれの国家の利益は、この独立がフラン

スを通じて実現することを要求している」と語った。

アルジェリア問題では、フランス共産党の指導者はなおさら民族排外主義の立場をとっている。さいきんフランス共産党の指導者は、かれらがずっと以前から「アルジェリア人民の自由への正当な要求を認めている」と弁解している。だが事実はいったいどうであろうか。

フランス共産党の指導者は長期にわたって、アルジェリアの民族独立の権利をまったく認めず、フランス独占ブルジョアジーに追従して、「アルジェリアは、フランスの切り離すことのできない一部分である」と叫び、また、フランスは「現在においても、また将来においても、一つの偉大なアフリカの強国でなければならない」と叫んできた。トレーズらが最も関心をもっているのは、アルジェリアが毎年、フランスに「百万頭の羊」と大量の小麦を提供して、フランスの「肉類欠乏」問題と「食糧不足の補充」を解決できるということである。

見ていただきたい、フランス共産党の指導者が民族排外主義にいかに熱狂しているかを。プロレタリア国際主義のわずかなかけらでもかれらのどこに見つけ出すことができようか。プロレタリア革命家のわずかなひらめきでもかれらのどこに見つけ出すことができようか。かれらのこのような民族排外主義の立場は、国際プロレタリアートの根本的な利益を裏切り、また、フランスのプロレタリアートの根本的な利益とフランス民族の真の利益を裏切っているものである。

「人種論」と「黄禍論」を反駁す

ソ連共産党指導部は、民族解放運動に反対するすべての神器をことごとく使い果たしてしまったので、帝国主義のもっとも反動的な人種論にすがることしかできなくなった。かれらは、中国共産党が民族解放運動をだんことして支持する正しい立場を、「人種的、地理的障壁をつくり」、「人種的観点をもって階級的観点にとって代わらせる」ものだといい、「アジアとアフリカ人民の民族主義的偏見、ひいては人種主義的偏見を利用している」といっている。

もし世界に、まだマルクス・レーニン主義があらわれていないとすれば、こうした空言は人をたぶらかすこともできたであろう。ところが残念なことには、こうした空言の製造者は、悪いときに生まれてきた。現在では、マルクス・レーニン主義が人の心の奥深くまではいりこんでいるのである。スターリンはよいことをいっている。レーニン主義は「白人と黒人、ヨーロッパ人とアジア人、帝国主義の『文明的』奴隷と『非文明的』奴隷の間の障壁をうちこわした」（『スターリン全集』第六巻）ソ連共産党指導部は、ふたたびこうした人種主義の障壁をつくろうとして

いるが、これはまったく無駄骨折である。

現代の民族問題はとどのつまり、階級闘争の問題であり、帝国主義反対闘争の問題である。現在、世界中の白色、黒色、黄色、褐色など諸人種の労働者、農民、革命的知識人、反帝愛国のブルジョア分子、その他の反帝愛国の良識ある人びとは、アメリカをかしらとする帝国主義とその手先に反対する広はんな統一戦線を結成している。この統一戦線は、たえず強化され、拡大している。ここには、白色人種の側に立つか、それとも有色人種の側に立つかという問題が全然存在していない。存在しているのは、世界中の被抑圧人民と被抑圧民族の側に立つか、それともひとにぎりの帝国主義と反動派の側に立つかという問題なのである。

被抑圧民族が帝国主義と植民地主義にたいして、はっきりと一線を画さなければならないということは、マルクス・レーニン主義の階級的観点である。この一線をあいまいにすることこそ、帝国主義と植民地主義に奉仕する民族的排外主義の観点である。

レーニンは次のようにいった。「社会民主党の綱領のなかで中心点となるのは、まさに諸民族を抑圧民族と被抑圧民族にわけるということでなければならない。というのは、この区分こそ帝国主義の本質をなすものであり、しかも社会排外主義者とカウツキーがごまかして回避しているものだからである」（『レーニン全集』第二十一巻）いま、ソ連共産党指導部は、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の反帝闘争のなかでの団結を、「地理的、人種的原則を基礎とする」団結であるなどと中傷している。これはあきらかに、自己を社会排外主義者とカウツキーの地位におくものである。

ソ連共産党指導部は「人種論」を各方面に売り込み、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの民族解放運動を、有色人種が白色人種に反対する運動であるといいふらしている。このことはあきらかに、ヨーロッパと北アメリカの白人のなかに人種主義的敵がい心をあおり、世界人民の帝国主義に反対する闘争の目標をそらせ、国際労働運動における現代修正主義に反対する闘争の目標をそらせるためのものである。

ソ連共産党指導部は、いたるところで「黄禍」だとか、「ジンギスカンの脅威がまたもや現われた」とか大声でわめきたてているが、これは全然反ばくに値しないものである。この論文のなかでわれわれは、ジンギスカンが歴史上で果たした役割について論評を試みるつもりはないし、また蒙古、ロシア、中国などの民族の発展と国家形成の過程について論ずるつもりもない。われわれは、ただつぎの点でソ連共産党指導部の注意をうながしたいと思うだけである。きみたちがこうしたデマをでっちあげるとき、歴史をもう一度復習してみるのもむだではなかろうということである。ジンギスカンは当時の蒙古の汗（カン）（訳者注―蒙古諸族の首長の称号）であり、中国

とロシアはともにその侵略を受けた。ジンギスカンは、一二一五年に中国の西北と北方の一部の地方に侵入し、一二二三年にロシアに侵入した。ジンギスカンの死後、かれの継承者が一二四〇年にロシアを征服し、その三十数年後、一二七九年に中国全土を征服した。

中国の有名な文学者魯迅は、一九三四年にものした一文のなかで、ジンギスカンについてひとくだりのべたことがあるが、これはきみたちにも少しは役に立つであろう。ついでながらここに抄録して、きみたちの参考に供したい。

魯迅はつぎのようにのべている。かれが二十歳の時に、「『われわれ』のジンギスカンがヨーロッパを征服したあの頃は『われわれ』の一番はぶりがよかった時代であると、人の話すのを聞いたことがある。ところが、二十五歳になってはじめて、いわゆる『われわれ』の一番はぶりがよかった時代なるものは、その実蒙古人が中国を征服して、われわれが奴隷になっていた時代である、ということを知ったのである。今年の八月になって、ちょっとした故事を調べる必要から、蒙古史三部をひもといてみて、はじめてつぎのことを知った。蒙古人が『オロシア』（訳者注―ロシアの旧称）を征服して、ハンガリー、オーストリア辺まで侵入したのは、中国全土を征服する前のことであって、当時のジンギスカンはわれわれの汗（カン）ではなかった。そこで、奴隷的支配をうけたという面では、ロシア人はわれわれの先輩である。だからかれらの方が『われわれのジンギスカンが中国を征服したその頃はわれわれの一番はぶりがよかった時代であった』というべきであろう」（『魯迅全集』第六巻）

世界近代史の常識を少しでももっている人なら、ソ連共産党指導部がわめきたてている「黄禍論」は、ドイツの皇帝ウィルヘルム二世の衣鉢をうけついだものにすぎないことを発見するであろう。すでに半世紀もまえに、ウィルヘルム二世は「朕（チン）は黄禍論者である」と宣言しているのである。

ドイツのウィルヘルム皇帝が「黄禍論」を宣伝したのは、中国の分割、アジアの侵略、アジア革命の弾圧に一歩をすすめ、ヨーロッパ人民の革命への視線を別の方向にそらせ、さらに当時かれが積極的に準備していた帝国主義世界大戦と世界制霸の争奪に煙幕をはるためであった。

ウィルヘルム二世が「黄禍論」を宣伝したのは、ヨーロッパのブルジョアジーがきわめて腐敗した、きわめて反動的な状態にあった時であった。それはまた、一九〇五年のロシア革命の前後にあたり、民主主義革命が中国、トルコ、ペルシアを席巻し、インドにもその影響が及んでいた時でもあった。まさにこの時に、レーニンが「後進的なヨーロッパと先進的なアジア」という有名な言葉をのべたのである。

当時のウィルヘルム二世は名を一世にとどろかせた大人物であった。だが、かれはその実日光

の下におかれた雪だるまにすぎなかったのである。まもなく、この反動の親玉はそれの作りあげた反動的理論もろともに、あとかたもなく消えうせてしまったのである。これに反して偉大なレーニンとその輝かしい思想は、永遠に若々しい生命力をもちつづけているのである。

五十年の歳月がすぎさった。この間に、西欧と北米の帝国主義は、さらに腐朽の道をたどり、さらに反動化し、その寿命もまたいちだんとちぢまってきた。それと同時に、アジア、アフリカ、ラテンアメリカを席巻する革命のあらしは、レーニンの在世中より、何倍もはかりしれないほど壮大なものになった。このような時に、ウィルヘルム二世の役柄をふたたびこのんで演ずるものがいるとは、まったく歴史にたいする嘲笑である。

旧修正主義のやきなおし

ソ連共産党指導部が民族植民地問題のうえで実行している政策は、ほかでもなく、破産した第二インターの修正主義的政策である。両者の相違は、わずかにつぎの点にある。すなわち、第二インターの修正主義が帝国主義の旧植民地主義に奉仕していたのにたいし、現代修正主義は、帝

国主義の新植民地主義に奉仕している。

旧修正主義は旧植民地主義の調子にあわせて歌い、フルシチョフは新植民地主義の調子にあわせて歌っている。

ベルンシュタインとカウツキーを代表とする第二インターの英雄どもは、かつて帝国主義の旧植民地支配の弁護士であった。かれらは公然と、植民地支配は進歩的なものであり、それは植民地に「高度の文明をもたらし」、「生産力を発展させた」とのべた。かれらはさらにすすんで、植民地を廃止することは、「野蛮な状態にもどることを意味する」とさえのべたのである。

この点においては、フルシチョフは旧修正主義者とややおもむきをことにし、あえて旧植民地主義制度をのろい、ののしった。

フルシチョフはなぜこれほど大胆になれたのか。ほかでもない、帝国主義の調子がすでに変わってしまったからである。

第二次世界大戦後、社会主義革命と民族解放革命の両方から打撃を受けた帝国主義は、つぎのことを認識せざるをえなくなった。「西側諸国が植民地主義の現状を維持しようとするならば、必然的に避けることのできない暴力革命と失敗をまねくであろう」また、旧植民地主義の支配形態は、「かえって『できもの』となる可能性がひじょうに多く、その『できもの』は国家の生命

に経済上、道義上の活力をうしなわせるだろう」だから、方式を改めて、新植民地主義を実行する必要があるのである。

それだからこそ、フルシチョフは新植民地主義者の歌ごえに調子をあわせて、一方では「植民地主義消失論」を宣伝して、新植民地主義を粉飾し、他方では被抑圧民族に新植民地主義を受け入れるようにすすめているのである。かれは、力をつくして、つぎのようなことを宣伝している。被抑圧民族が文明開化の帝国主義といわゆる「平和共存」を実行すれば、「民族経済を急速に発展させ」、「生産力を増大させる」ことができ、被抑圧国の「国内市場を限りなく拡大し」、「工業の発達した国の経済に必要な、より多くの原料や各種の製品、商品を提供する」ことができる。同時にまた、「発達した資本主義国の住民の生活水準を大幅に引き上げる」ことができる。

フルシチョフはまた、第二インターの修正主義の兵器庫から、ひどくさびついた兵器を捜し集めることも忘れていない。

たとえば、

旧修正主義は民族解放戦争に反対し、民族問題は「国際間の話しあいを通じてのみはじめて解決でき」、「平和方式で前進する」と主張した。フルシチョフはこの面で、なおさらのこと第二

インターの修正主義者の衣鉢をうけついでおり、「平穏に植民地主義制度を葬る」と主張している。

旧修正主義者は革命的マルクス主義者を攻撃し、「ボルシェビキは、実際上、好戦的な社会主義である」と中傷し、「コミンテルンは、百戦百勝の赤軍の銃剣にたよれば、労働者の解放を実現することができると夢みており、また、世界革命を完成するためには、新たな世界戦争をおこなわねばならないと考えている」と中傷した。しかも、かれらは、このような局面は、「新たな世界戦争のきわめて大きな危険を生ぜしめた」とデマをとばした。今日、フルシチョフが中国共産党その他のマルクス・レーニン主義的兄弟党を中傷するにあたり用いている語句は、当時旧修正主義者がボルシェビキを中傷するのに使った語句とまったく同じである。ここで両者の差異を捜しだすのはきわめて困難である。

フルシチョフが帝国主義の新植民地主義に奉仕していることは、旧修正主義者が帝国主義の旧植民地主義に奉仕していたのとくらべてなんらの見劣りもしない、といわなければならない。

レーニンは、つぎのように指摘した。すなわち、帝国主義の政策は、国際労働運動を二派に分裂させた。そのうちの一派は革命派であり、他の一派は日和見主義派である。革命派は、被抑圧民族の側に立ち、帝国主義者と植民地主義者に反対した。これとは反対に、日和見主義派は、帝

国主義者と植民地主義者が植民地、半植民地人民の血と汗をしぼりとることにたより、その残飯を分けてもらって、肥えふとったのである。かれらは帝国主義者と植民地主義者の側に立ち、被抑圧民族の解放をめざす革命に反対した。

レーニンが指摘した、国際労働運動のなかの革命派と日和見主義派の色分けが、現在資本主義国の労働運動のなかにあらわれているばかりでなく、プロレタリアートが政権を握った社会主義国のなかでもあらわれている。

歴史の経験が証明しているように、民族解放運動が徹底的な勝利をかちとるには、かならず革命的な労働運動と強固な同盟を結ばなければならない。また帝国主義や植民地主義のために奉仕しているかの修正主義派とはっきり一線を画し、かれらからの影響をだんことして排除しなければならない。

歴史の経験が証明しているように、西欧と北米の資本主義国の労働運動が徹底的な勝利をかちとるには、かならずアジア、アフリカ、ラテンアメリカの民族解放運動と緊密な同盟を結ばなければならない。また修正主義派とはっきり一線を画し、かれらからの影響をだんことして排除しなければならない。

修正主義者は国際労働運動の隊列のなかにまぎれこんだ帝国主義の代理人である。レーニンは

「帝国主義反対の闘争は、それが日和見主義反対の闘争と不可分に結びつかないなら、一つの空虚な虚偽の空文句にすぎない」とのべている。（『レーニン全集』第二十二巻）そこで、今日、帝国主義と新旧植民地主義に反対する闘争は、新植民地主義の弁護士に反対する闘争と不可分に結びつかないわけにはいかないのである。

帝国主義がいかに偽装しようと、いかにもがこうと、また新植民地主義の弁護士がいかに粉飾し、いかに手助けしようと、帝国主義と植民地主義は、どうしても必然的な滅亡の運命を避けることができないのである。民族解放革命の勝利は阻止することができない。新植民地主義の弁護士は、最後には徹底的に破産するであろう。

万国のプロレタリアートと被抑圧民族は団結せよ！

63.12.30

新植民地主義の弁護士
ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（四）

1963年11月　初版発行　　定価 20 円

出版者　外文出版社
（北京阜成門外百万莊）

発行者　中国国際書店
（北京 P. O. B. 399）

編号．（日）3050—791　　3—J—572P
00030

▲ ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違の由来と発展

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す

B 6 判　86ページ　定価40円

▲ スターリン問題について

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（二）

B 6 判　34ページ　定価20円

▲ ユーゴスラビアは社会主義国か

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（三）

B 6 判　62ページ　定価30円

出版者　北京　外文出版社

発行者　北京　中国国際書店